



# 南極

第2号

平成12年1月19日  
南極倶楽部会報

## 「隊員記者」

田 英夫

昭和30年(1955年)の秋だったと思う。当時共同通信の政治部記者として外務省を担当していた私に、社会部長から電話があり「至急会いたい」ということなので新橋駅近くの喫茶店に向かった。政治部記者の私に、社会部長が用事というのは - と思いながら行ってみると、いきなり「おい、キミ南極へ行かないか」という話であった。社会部長の話が続けよう。「今度“国際地球観測年”ということで、国際的に協力して南極を科学的に調査することになった。日本も参加する方向だ。共同通信としても記者を派遣したい。しかし“同行取材”などということは許されないだろう。隊員として観測隊の仕事をしながらか記事を送るのがよいと思っている。出来たらオレが行きたい。しかし肉体的条件が許さないかもしれない。その場合はキミ行ってくれないか」

社会部長の斉藤正躬さんという人は、戦時中、スエーデンのストックホルムに特派員として活躍した人で名文家として知られ、スポーツマンでもあった。斉藤さんの言葉の中の“同行記者”ではなく“隊員として”という部分が、後に大変大きな意味を持つことになるのは、当時の私には全く分からなかった。

オッチョコチョイの私は、詳しく考えもせず「行きます」と答えた。その後この南極観測隊の計画は着々と進んだ。共同通信から“隊員として”一人の記者が派遣されることになった。しかし身体検査の結果斉藤さんは御自身の予想通り不合格になり、私に大役が回ってきた。他に予備候補の三人も準備された。しかし事情が分かってくるに従って、私の気は重くなっていった。報道関係は朝日新聞が記者一人を派遣するが、主に朝日新聞の記事を書くのが役目だという。そうすると他の全国の新聞、放送用の記事は私が書くことになる。まさしく「大役」である。

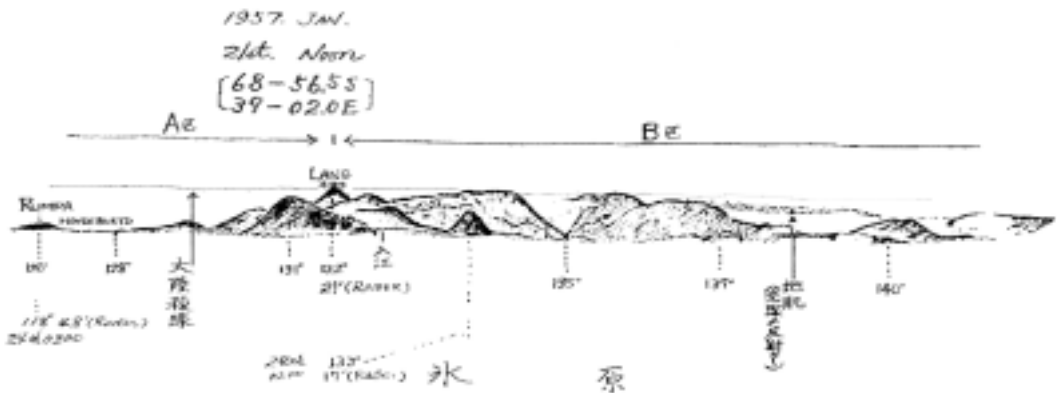
そして昭和31年(1956年)11月8日に「宗谷」が東京港を出港したのである。それまでの半年ほどは、まさに“夢中”であった。冬の<sup>とうふつこ</sup>涛沸湖の耐寒訓練、春の乗鞍岳での雪中訓練、雪上車の運転の練習、南極に関するさまざまな文献の勉強と - 疲労を感じるヒマもないほどの忙しい毎日だった。だから宗谷が出港し、その夜は千葉県館山沖に停泊したのだが、本当にホッとした気持ちになったのを覚えている。

斉藤社会部長がいわれた“同行記者”ではなく“隊員として”ということの意味がその後次第に分かってきた。あの時若し、報道機関が多くの場合にやるよう

に“同行記者”という立場である宗谷に乗っていたらどうなっていただろうか  
- と考えてみたこともあった。50人の隊員の半分は地球物理学の学者だった。地質とかオーロラとか電離層とかのそれぞれの専門学者である。同時に山登り、特に冬山の経験者がほとんど。他に本当の山登りの専門家が数人、医者 of 二人も山登りの専門家、そして4人の立山

のガイド出身というまさしく山の専門家といった顔ぶれだ。そこで一人だけ「記者でございます」と何もせずに記事だけ書いていたらどうなるか。私は斉藤さんの言葉の意味をかみしめながら、航海中の樺太犬の世話、そして犬ゾリ隊員志願、雪上車の運転手等々に取り組みながら記事を書いた。懐かしい思い出である。

(1次夏・報道)



「遙かなり南極」

南極大陸の一部 愈々鮮明に我々の眼前に迫る。...雪に体をこすりつけて喜ぶ犬達を見ると全くいじらしくなる。よくここまで来たものだ。... 1次隊の日記より 三田安則(1次宗谷・航海)

ようやく昭和基地へ

川口貞男

昭和34年1月14日、基地北方163kmから第3次越冬隊の第1便が基地へ向け飛び立ち2頭の犬の生存が確認された。第2次隊の失敗から船が近づけなくとも、という事でヘリコプター輸送が採用され見事に図に当たり、昭和基地とつながった。黒犬2頭のアイディンティのため、第1次で越冬し犬の世話をした北村君がすぐに送り込まれ、タロー、ジローである事が確認された。宗谷と基地間がこれだけ離れていると飛行に適した日は少なく、1月30日まででようやく40トン足らずの荷物、人間が送り込まれ12名の越冬が可能と判断されてい

た。

私が基地の永田隊長から基地へ飛ぶ事を命ぜられたのはこの段階で、報道の深瀬、オブザーバーのダニエル・メロイ、アク、トチ、ミヤの3頭の犬、その次に川口と名簿にあった。私はこの犬達を連れて来いという事であった。第2次で犬を置き去りにした責任者の一人として「犬殺し」と非難を浴びていた村山さんは堂々と連れ込むわけにはゆかず、ひそかに電気製品のあきダンボールに入れて持ち込んでいたものである。

第2次隊では40日余ひょうびょうたる海氷のみをいやになるほど見て帰ったが、ようやくヘリコプターの上から南極大陸の岩山を望見し感激し乍らも、さて

この小犬達、タロー、ジローにガブッとやられはしないかと心配していた事を憶えている。隊員達と共にタロー、ジローもヘリの側に来ており恐る恐る降ろすとタロー、ジローと小犬達はくんとお互いに嗅ぎ合って挨拶は了ったようで、前任者のあとをチョコチョコとくっついて岩場の方に消えて行った。この犬達の対面は報道され、小犬を連れていった事がばれたのであるが、タロー・ジロー効果の故か、「犬殺し」の罰は御赦免になったらしい。

私物をもって無線棟（気象部門はこの中にあった）に入ると永田隊長がいて、「清野が一人で大変だからすぐ手伝え、ただ末だ君を越冬させるとはきめてない。いつでも船に戻るように私物をだすな」という。天気が悪化して空輸がとまると、清野さんから「ここでは駆けつけ3杯で、新入りは水汲みを10杯することになっている」という。チンケース（1斗缶）を背負い子にくくりつけ柄杓をもってパドルの水を汲みに行く。青い目のニコヨンさんといわれていたメロイが要領を教えてくれた。越冬が始まって3月中は3次隊ではパドルの水を飲み水・炊事に使い、4月以降氷山の氷を使い水の使用量は週1の入浴、洗濯を除くと年間を通じ1人1日10ℓと記録されている。

その後は天気が持ち直し、1月31日までに52便、52トンの物資が運び込まれ、越冬人数を14人迄増やす事となり、ようやく私の越冬も可能となり、私物を広げる事が出来た。結局2月5日累系58便、57トンの物資輸送を完了し14人が越冬した。

（2次夏，3次冬・気象）

## 第7次隊夏の体験

### 國分 征

7次隊は、いわば探検隊的な色彩が強かった6次までの観測隊から、恒久化へと新しく衣替えをする前段階的な観測隊であった。例えば、主な建物についていえば、新しく用意された発電棟、飯場棟や送信棟などを除くと、通信棟、電離棟、地磁気変化計室は南極観測の草創期に準備されたものだった。パネル建築のはしりともいべきこれらの建物は、坪当たり70万円、変化計室は非磁性材料を使用しているため、少なくともこの2倍以上の費用がかかったらしい。とにかく、国際地球観測年の本観測に備えたものが基地に建設され、ようやく日の目を見たのだった。

1965年11月20日に出港した新造船「ふじ」は順調に航海を続け、12月31日には、昭和基地に第一便が飛んだ。基地では、正月早々から再開に向けての作業が始まった。「ふじ」は、12月30日に定着氷に接岸したが、ヘリコプターによる本格的な輸送は、1月4日から開始された。船側の隊員の仕事は、ヘリコプター搭載物の重量を減らすため、木箱、木枠はできる限りはずして軽くするための定着氷上での開梱作業だった。

私が基地へ飛んだのは、1月7日、特殊技能を持たない観測担当の最初の仕事は、凍った通路のつるはしによる砕氷作業だった。通路は、梱包に使った木箱で作られていたが、収納場所としても利用されていた。木箱の中は、様々な物があった。食料も貯蔵されていた。馴れないつるはし作業の一休みに、少なくとも4年以上たっていた食べ物をおそろおそろ口にすることもあった。通路の氷は、閉

ざされた4年の間に夏に溶けたたまり水が凍ったもので、飛び散った氷がヤッケに付くと溶けてにおいを発する、あまり気持ちの良い代物ではなかった。

私が、1965年に再開される南極地域観測隊の越冬隊員候補になったのは、大学院を終え職につき半年ほど経った頃だった。できそうな新しいことは何でもやってやろうと、誘導磁力計、VLF受信装置のほか、紙テープ記録の時代にデジタル記録装置まで用意した。かなりの予算を使ったデジタル装置は、故障続きで結果的にはものにならなかったが、ほかの観測は何とか研究につながるようなデータがとれた。ただ、あまりにも欲張ったため現地で苦労したことは否めない。

最も基本的な観測装置であるフラックスゲート磁力計は、センサーのみを作り、電子回路の部分は現地にあるものを復活させるという楽観的な計画だった。第3次隊で小口隊員が持ち込んだ磁力計は、東北大と日立製作所が共同で開発した日本のフラックスゲート磁力計の2号機で、同程度の性能のものができそうになかったことと、磁力計を新規に作ると予算的に他の機器の製作が殆どできなくなるという事情もあった。実際、VLF観測を新しく始めることにしたものの、アンテナまで予算が回らず、アンテナの元素は用意したが、支柱は基地に利用できるものがあるはずだとのこと、基地で何とかしろという具合だった。

夏の基地作業では、通路の砕氷から始まり、建物組立、食料の運搬、アンテナ建設などを経験した。食料の運搬に使った車両は、農民車（通称百姓）で、仕事の相棒はアメリカのNSFから派遣されたオブザーバー、山男のフランシスさん、

一日半くらいだったと思うが、すべて手作業二人で黙々と仕分けをした。「ふじ」が、昭和基地に初めて接岸した1月27日までの間に従事した作業の大半は、アンテナ建設だった。ベテランの大瀬隊員をボスとするアンテナ建設班の一員となり、観測用のアンテナや通信アンテナの建設作業で、削岩機によって穴をあけては、溶かした硫黄を穴に流し込みボルトを固定し、支柱を引き上げるといった作業が続いた。今では使うことがなくなったと思うが、当時は、岩盤の穴の中にボルトなどを固定するために硫黄を溶かして流し込んだ。硫黄は、固まると溶けた状態より容積が増えるため、がっちり固定できる。

通信アンテナ作業は1週間ほどだったと思うが、1月26日、アンテナに昇り作業していた大瀬親分が、「ふじ」のマストが見えるという。まさかとそんなことはないだろうと思っているうちに「ふじ」は接岸した。接岸した「ふじ」に戻り、二十数日ぶりに入った風呂で、汗ならぬ垢を流した時の心地よさとその後の脱力感が、今でも記憶に残っている。アンテナ作業の実績がものをいったかどうか分からないが、結果として通信用のアンテナ支柱の予備をせしめ、立派なVLF帯自然電波観測用アンテナができた。25年後、32次隊で昭和基地を訪れたときにも、長年の風雪に耐えたこのアンテナは立っていた。

磁力計についても、何とかあったものの綱渡りといった状況だった。新しい磁力計センサーを現地においてあった装置につなぎ、どうにか動作するところまでいったのだが、レスポンスが悪くまともなデータにならなかった。このため越冬のはじめの1カ月ほど無駄な時間を費や

してしまった。最終的には、古いセンサーを復活することを試みることにして、切れかかった古いケーブルを修復延長し、接続したところ正常なデータが取れるようになった。4年間無人の基地に放置されていた磁力計が復活した時、感激とともにほっとしたことを思い出す。最も基本的なデータを取得できないおそれもあったわけで、今にして思えば正に冷汗ものの経験であった。

(7次夏・超高層, 32次夏・隊長)

## 吹上御殿

### 星合孝男

吹上御苑の誤りではない。ふじ乗員各位がいつの間にか付けた、施設名であろう。1965年12月末、氷海に入り揺れも納った「ふじ」の飛行甲板で、長谷川棟梁指揮の下で角材とベニヤ板の切り込みが行われた。やがてこれらの材料は、木製櫓の上に組み立てられ、夏用の簡易便所になった。海氷上の便所は4部屋に仕切られ、用を足すとそれは直下の雪の上に落ちた。堆積物が山盛りになると、雪上車で櫓をそよと曳いた。4部屋のうちでも左右両端の使用頻度が高らしく、山の大きさが何よりの証拠だと、細かな観察をした人がいた。

氷の上に溜まった物は、南極とは言え夏の日射を受けて次第に沈み、遂には海水中に移り微生物によって分解されるはずである。したがって、櫓はタイドクラックより沖に置かなければならない。主な利用者、飯場棟の住人は、地吹雪の日などロールペーパーをポケットに、一大決心をして駆け出さなくてはならない。便所の壁面を主風向の北東に向け、真向からの風こそ避けるように置いたもの

の、風の影響は皆無とはいえない。吹上御殿の名が起こった由縁であろう。ただ扉もないこの御殿にも具合の良いことがあった。遠くから、先客の有無が判断できる点であった。

1967年8次の越冬を始めた頃、私達はタイドクラックで用を足すのが日常であった。馴れてしまえば、多少の寒さなど苦にはならないことを知った。無風快晴の朝など、クラックには2・3人がタテに並んで、浩然の気を養ったものである。

しかし時代は変わった。今や南極の自然環境を守るために、排泄物は微生物の作用で分解した上で、海に投棄することになっている。昭和基地にもその設備が設けられると聞いている。南極も随分住みにくくなってきたものである。

(7次夏・海洋生物, 8次冬・生物)

## 思い出の南極越冬

### 五味貞介

早いもので私が越冬隊に参加させていただいたのが1972年の第13次隊で28年前になる。1956年(昭和31年11月8日)第1次隊は永田武隊長、西堀栄三郎越冬隊長そして宗谷の船長松本満次氏が晴海より一路南極に向かい日本初南極地域観測遠征隊が出発したのであった。小生はこの報道を新聞上で知り、「南極へ行ける人達は、どのような人が行けるのだろ?」と思ったのが、きっかけで、それ以後は、南極のとりことなり、南極に関係するニュースは好んで読んだのである。1969年小生の所属している日本料理研究会の会報に第12次日本南極地域観測越冬隊食糧担当員募集とあり、すかさず、書類を取り寄せ応

募したが残念だった。再度70年応募し第13次隊の川口貞男隊長との面接となり、その後第13次の隊員に拾ってもらったのである。いまだかつて川口隊長に聞いた事は無いのだが、面接の第一印象をどのように思われたか？おそらくすごいやつだと思われたのではないかと思う。

3月の冬期訓練では高山病にやられ、訓練もろくに受ける事なく又訓練が終わり下山し、すずらん小屋での打ち上げには、酒をあびるほど飲み酔っぱらい、全員裸にして、踊らせるなど、とにかく、ばかその者であった事は間違いない。とにかくやる事はやれる人間であった。越冬中は、小生のポリシーは、何が何でも楽しい食事、そうして全員健康そのものを第一にして、ブリザートで暗くなれば、ブリザートデーと言って、料理を作り酒を振る舞いとにかく楽しくの思いは強かった。それを大きな気持ちで見守っていただいた川口隊長がすばらしかったと思うし、隊員全体がムード良く楽しければ、アイデアも自然とわき出るものなのである。昼食の駅弁シリーズなどでも全員が楽しんでくれた。それぞれの誕生日会には、その誕生者に嗜好を聞き、思いきりの特好料理を楽しんでもらったし、東條の福島正治君相手方ですばらしく良くやってくれたからこそ一年間不安無くやれたと思う。持ち込んだ酒類はオールド12本×49ケース、缶ビール24本×640ケース、瓶ビール12本×100ケース、コンクウイスキー20ℓ×5缶、リザーブ12本×10ケース、日本酒36本×100ケース、さらに14次隊にスワンビール60ケース買って来てもらったが4ケース残すのみ、よく食べよく飲んだものだ。13次の全員

に心より感謝し川口隊長ほんとうにありがとうございました。元気で永生き、願っています。南極に行った方々全員集合、倶楽部を盛り上げるべし。

(13次冬・調理)

## “ふじ”の思い出

西野正洋

“ふじ”は、24次が最終行動であった。

新砕氷艦“しらせ”は、24次行動前に既に進水し、ふじに替わるための諸準備を進めていたが、ふじの24次東京出港日には、浦賀水道でふじと行き会いつつ、ふじの最終行動を激励してくれた。

航空整備の私にとって、艦艇乗組みは始めてのことであり、艦内のことは殆ど何も解らず、顔見知りの者も少く、ふじ乗組みに際しては期待とともに不安も大きかったが、ふじの行動全般を通じて、(トラブル等は聞いていなかったので)順調に経過し、観測隊員や乗組員に病人や怪我人が出ず、物資輸送等艦側の任務は極めて円滑に遂行され、辛いことは何も無く、忘れ難く楽しい思い出ばかりであった。

美しい氷海の航行や、ヘリから望んだ果てしない白い大陸、雄大な冰山等、南極の大自然こそ最も感動し脳裏に焼き付いているが、南極行動に参加された人々の様子にも忘れ難い思い出が多く、そのいくつかを書いてみる。

竹内秀一艦長は、全ての責任を一身に負う覚悟でおられたようで、多くの場面で、艦長の気配りを感じ、幾度かは、近づき難い程の真剣なお姿を拝見し緊張したものであった。

艦が洋上に出ると艦長の責任と権限は

絶大なものとなる。竹内艦長は、特に、気象・海象をどう読み艦をどう進めるかについて、当然のことながら最も神経を使っておられることがよく判ったが、乗員の健康管理や食事などにも気遣いされていた。

洋上航海中のある日、食後のデザートとして出されたS3佐のオレンジの中味が運悪く少し腐っていたことがあった。呑気者の私は、「Sさんは運が悪かった」としか考えなかったが、艦長は、補給長に「今後このようなことは絶対あってはならない」旨注意されたのである。呑気者の私は、「オレンジの中まで見えないのに、これは難題ではないか」と思ったが、次にオレンジが出た時には、半分に切ってあったので、ホッとしたものであった。

赤座真一副長（故人）は、艦内隅々にまでよく気配りされ、乗員の融和団結に大いに活躍された。感性豊かで、ユーモアのある大変楽しい人でもあった。

ふじが物資輸送のポイントについてから、ブリッジで艦側作業全般の指揮に当たっておられ、空輸作業の報告に行くと、ブリッジ前方に1羽の皇帝ペンギンがふじを監視しているようにこちらを向いて立っているのを見て、「今日で 日目だ。全然動かないな。」と感心され、ブリッジ勤務の乗員達に幾首もの歌(?)を披露しておられた。

その一首「氷原に 群れを離れし 皇帝は ふじを望みて 6日佇む」

杉本陽一飛行長は、ベテランパイロットであったが、飛行作業に関しては、ベテラン飛行士達に任せることができたので、専ら艦長、副長の相談相手が仕事であった。円満な人柄で、広く乗員から人気があったが、多彩な人でもあり、副長

以下私達数名は飛行長の門下生となって詩吟を習っていた。

前晋爾観測隊長の潔さには感動した。

分解輸送していたセスナとピラタスを、航空整備士1名（海上保安庁から出向されていると聞いたが、名前を忘れてしまった）の適切な指導の下、観測隊の皆さんで見事に組み立てられたが、この航空機の安全保証は、作業に当たった隊員代表として観測隊長がテストフライトに同乗し、身をもって証明する慣わしとなっていたらしい。簡単なチェックだけで飛び上がった。

身の危険等はすでに覚悟の上での越冬隊参加なのだろう。海上自衛隊の航空安全の認識とは、大分違っていた。

ヘリコプター（S-61A）整備が私の責任であったが、クリチカルなトラブルは発生せず、高稼働率が維持でき、輸送任務を全うできた。

艦長以下すばらしい指揮官達と、事に臨んでは一致協力する乗組員諸官、そして観測隊の皆さんの協力を得、天候にも恵まれ、物資空輸は極めて順調に実施でき、連続物資空輸の最長日数（21日）と、物資空輸期間の最短日数の記録を樹立できた。

いよいよ昭和基地を離れる時が来た。私は何故か昭和基地への最終フライトに同乗していた。越冬隊の皆さんは、どんな気持ちだろうか。心配になった。

帰る人、残る人、感無量である。最も涙を流していた人は、残る人ではなく、友人を残して帰る人（M氏）であったことに胸を打たれた。

人々の情愛のすばらしさを目の当たりにして、感動した一時であった。

「氷原を 写して流る白雲の 想い届けよ 古里の山河に」（24次南極新聞か

ら)

「さようなら 呼べど応えぬ氷海に 名残りは尽きず ふり返る」(同)

私は、その後の勤務で、太平洋戦争の激戦地硫黄島で1年余を過ごしたことがある。南極での越冬とは比べられない好生活環境ではあったが、自分達の仲間以外に誰もいないという閉ざされた世界で、文化圏を離れ、共に苦労し、喜びを分かち合い、飲み交わしたということでは、類似点があるのではないかと思っている。

硫黄島で一緒に勤務した者とは、1年余の短い付き合いではあったが、兄弟以上程に親しくなり、その後も交流がある。そして、硫黄島の一木一草に至るまで、懐かしい想いがしている。

越冬隊の皆さんにおかれては、極寒の彼の地が、さぞや懐かしいに違いないと思うのである。(24次ふじ・整備長)

## しらせ就航

小林正幸

「しらせ」の就航、早いもので期待に胸を膨らませ「しらせ」船上の人となってから15年が経ってしまった。「しらせ」は「ふじ」に代わる南極観測船として1982年11月に完成し1983年11月14日、我々25次隊を乗せ南極への処女航海に出発した。全長134m、最大幅28m、基準排水量11,600tは大きさ、そして性能とも当時としては世界最大級の砕氷船だ。晴海に接岸したその勇姿はオレンジ色の船体が青空に映え、この船で憧れの南極まで行くのだと思うと心が弾んだ。27歳の秋だった。

「ふじ」に代わり新しい観測船ができたとき、船名の一般公募があった。私も

いくつか応募した記憶がある。もっとも採用はされなかったが・・・出港が近くなってくると、テレビでも「しらせ」の特集が放映されたりと、マスコミに紹介されることも多くなり期待に胸が膨らんだ。

当時所属していた銚子無線電報局からは毎年のように通信担当の越冬隊員が参加していたこともあり「ふじ」で出航する先輩の見送りに晴海に何度か行ったことがあった。船内を案内してもらい観測隊員の船室を覗くと狭く、薄い黄緑色に塗られた鉄パイプが露出し、ずいぶん窮屈な場所だなと感じた。まさに自衛艦の船室だ。もっとも乗組員の部屋に比べればはるかに恵まれていたようだ。たしかハンモックが並んでいたような記憶がある。「しらせ」に乗り込んでみると観測隊員室は露出したパイプは目立たず、化粧合板の壁に囲まれライティングデスクが付き、ちょっとした独身寮の2人部屋といった感じだ。所々にあるラッシング用のフックや椅子の移動止めの鎖が、ここが船室だと認識させてくれる。廊下も広く談話室でキャロムに興じていると客船でくつろいでいる感じさえするほどだった。「宗谷」、「ふじ」に続く最新鋭砕氷船「しらせ」の恵まれた環境で南極に行かれることを幸せに思った。

出港の日、1983年11月14日。みごとに晴れ渡った晴海埠頭の岸壁に「しらせ」は接岸していた。南極への処女航海とあって例年よりも見送りの人は多く岸壁は人でいっぱいだった。晴海に着くと職場の仲間や友人達に拍手で迎えられ、花束や差し入れをたくさんもらい、何度も胴上げされた。そのときの写真が朝日写真ニュースに載り、今も大切に持ってある。たくさんの人々に見送られ



たるの光」が流れる中、「しらせ」は崖壁を離れていく。見送りの仲間の顔がどんどん小さくなっていく。上空には数機のヘリコプターが飛び回り、富士山が青空にくっきりと映えて見える。しばらくすると、空にはP2-CとP3-Cが飛来し、前方から南極観測船の任務を解かれた「ふじ」を先頭に自衛艦が4隻進んでくのが見えてきた。自衛隊員が艦上に整列しているのが見える。それらが「しらせ」の右舷を1直線に並んで、ゆっくりと通り過ぎていく。まさに「ふじ」と「しらせ」の世代交代の瞬間を見たような気がした。(25次冬・通信)

### 「ふじ」「しらせ」歴代艦長の近況

久松武宏

「ふじ」の松浦、森田、「しらせ」の倉田各艦長は南極倶楽部に時々出席されるので皆さんお会いした方もおられる筈です。

本多、松島、磯部艦長は、もうお亡くなりになったことは皆さんご存じのとおりです。その他の大森艦長はやや体調不良の面もあるようですがお元気、前田、蔵本、田邊艦長は益々お元気の様子です。根井、竹内艦長からはお便りがなく、詳細は不明ですが、お元気のことと推察しております。

「しらせ」艦長の方ですが、佐藤さんは岡山県倉敷の方で金融機関でバリバリやっております。本田さんは熊本県の方に帰られ、しらせの入出港等の時には上京されたりしております。上垣さんの方は横須賀市に住んでおられまして、仕事とゴルフ両方に精をだしておられるようです。斎藤さんは造船所のドックマスターとして第一線で活躍しておられま

す。加藤さんは自衛官として現役でして、呉で教育隊司令をしておられます。帖佐さんは南極観測支援室長として文部、防衛間の調整等南極観測事業の裏方として力強い活躍をしています。

最近、「ふじ」「しらせ」で一緒だった方々にお会いした際、南極倶楽部のPRをしております、今後の南極倶楽部の発展に少しでも貢献出来ればと念じております。(34次・しらせ艦長)

### 南極倶楽部「発会に寄せて」

松浦光利

昨年二月十七日、神田須田町「おんぐるや」において、南極OBによる「南極倶楽部」が盛大裏に発会しました。

以後、この会合は毎月(第三水曜日)同店において行われ、着々と成果をあげつつあることは慶びにたえません。

また、このたび会報「南極」を発行されることになりましたが、倶楽部の発展と会員相互の連けい、向上のため、不可欠の事業でありますので、是非とも成功させたいものであります。

日本の南極観測が開始されてから既に四十次を数え、OBの数は隊、船だけでも実数で五千名以上になり、一大縁者集団ができました。

倶楽部は未だ発会早々で、これから本番を迎えますが、店は渡辺久好店長指揮による特別サービスで雰囲気満点、ビール、焼酎を飲みながら、南極を想い、旧交を暖め、多様の放談に花が咲いて尽きるところなく、無上の生甲斐の場ともなっています。

今後は、南極OB大集団をバックに、村山隊長を中心にして、倶楽部の運営を強固にするとともに会報「南極」の内容

を充実し、内外に向け、権威のある存在となるよう期待してやみません。

OB各位のますますのご健勝をお祈りいたします。(8次・ふじ艦長)

- 会務連絡 -

来月、2月16日(水)の例会は南極倶楽部発足の一周年になります。何らかの記念催しを検討中です。多数の参会を期待します。例会幹事は、南極現役、しらせ、宗谷、設営、同行記者が二回づつ担当し、次は「超高層」が2・3月を担当されます。例会幹事を募っています。倶楽部バッチ(番号付)を1,000円で頒布しています。会員番号150番までは当該バッチを残していますが、経費回収のために、御希望ならば早めにお求めください。幹事周旋担当 渡辺興亜  
連絡先: Tel: XX-XXXX-XXXX

- 編集後記 -

第2号をお届けします。当初の予定6頁をはるかに越えましたが、これも勢いがあるためと察しています。さらなる原稿を募ります。次号は4月19日(水)発行予定です。編集に関する連絡先: 神田啓史 e-mail: hkanda@nipr.ac.jp  
Tel: 03-3962-4590, Fax: 03-3962-5743

- 新入会員 -

会員番号 / 氏名 / 〒 住所 / / e-mail

86 原口 一之

87 林原 勝美

88 野元堀 隆

89 大下 和久

90 館野 章子

91 徳永 陽一郎

92 内山 長徳

93 木内 武郷

94 對馬 千陽

95 志賀 重男

97 高橋 昭好

98 山田 知充

99 黒川 武

100 本田 守忠

101 渡辺 久好

102 石沢 薫

103 井部 良一

104 柿沼 美千子

105 井部 初江

106 増田 克子

107 西部 美智子

108 細谷 昌之

109 村越 望

110 隈部 紀生

111 加藤 正義

112 岡田 多生

113 小黒 昭三

114 大山 佳邦

115 田口 章利